

馴鹿

麋

〔日本書紀十應神〕二十二年九月丙戌、天皇狩于淡路島、是島者横海在難波之西略。中麋鹿鳧鴈多在其島。

〔春波樓筆記〕間宮林藏と云ふ人、蝦夷の奥へ冬月行かん事を好みて、文化午年〇七十一月此地を發して、辛未正月にかへる。六月二日、予江漢馬が家に來る。冬月は海川皆氷となる故に、其上を渡り行く故に行きやすし、唐太の地に、トナカヒと云ふ獸あり、大さ大八車を引く牛程ありて、頭は大なる角あり、全體鹿の如し、蹄もわれてあり、如牛如馬畜ひて甚用をなすと云ふ、おらんだにては、レンシイルと云ひ、支那にては順鹿と云ふなり。

〔新撰字鏡〕麋諸羊反、平、久、自、加、又於保、自、加。

〔本草和名十五禽〕麋骨一名白肉陶景注云、正是一名麋、楊玄操、音不施於鹿。和名乎之加、乃保禰。

〔倭名類聚抄十八群名〕麋唐韻云、麋、居、鷄、反、字亦作麋。鹿屬也、本草音義云、麋音章一名麋和名久。

〔箋注倭名類聚抄七名〕按本草和名云、麋骨一名麋、楊玄操音九倫反、攷之、新修本草麋骨條、陶注云、

又呼爲麋、則知一名麋出、陶注、源君從本草和名引之、以爲楊氏音義文誤、說文、麋、麋屬、李時珍曰、麋、秋冬居山、春夏居澤、似鹿而小、無角、黃黑色、大者不過二三十斤、雄者有牙、出口外、俗稱牙麋。〇中按

久之可未詳。

〔類聚名義抄七鹿〕麋音章、俗、獐、麋、ク、シ、カ、シ、カ、シ、カ、麋、音、通、シ、カ、麋、ク、シ、カ、麋、音、君、麋、同、麋、音、壯、麋、音、牝、麋、音、子。

〔東雅十八畜獸〕鹿シカ略。中又倭名鈔に、本草音義爾雅注等を引て、麋一名麋クシカといひしは、此國

に産するものとも見え、クシカとは、似鹿而黃黑色なるをいひしと見え、けり、中略古語にクと略シ、とは萬葉集に、シ、ハ、ク、シ、ロ、といふ事を、仙覺抄には、鹿、去、肉、氣、味、す、ぐ、れ、し、な、い、ふ、と、見、え、た、れ、ば、鈴、羊、な、カ、マ、シ、と、い、ひ、ま、た、俗、に、鹿、を、カ、ノ、シ、と、い、ふ、も、並、に、其、肉、の、美、な、る、な、い、ひ、し、な、る、べ、し、。

〔和漢三才圖會三十八〕麋音君、麋音同、麋音壯、麋音牝、麋音子、和名久之加、俗云美止利。〇中